

イタリア人コーチの ワールドカップ分析

【ベースボールマガジン社】発行月刊誌サッカークリニック
2002年11月号、12月号連続掲載記事
天野泰男著

2002FIFA ワールドカップの余韻がまだ残る 7月25日、イタリアから大物コーチが来日した。ステファノー・ドッパビオ教授。2000年シドニーオリンピック代表や2000-2001シーズンインテルミラノでマルコ・タルデリ氏とチームを組みフィジカルコーチとして活躍した人物である。彼はトップレベルでの指導のほかに、長年にわたりローマにあるイタリアオリンピック委員会のアクアチェトーサスポーツセンターにおいて少年サッカープログラムの開発を行い、イタリアサッカー協会として6 - 16歳の育成指針をビデオや著書を通じて示してきた。今回の来日は、フットボールクラブフレスカ(神戸市)が1996年より彼を中心としてイタリアサッカー界と交流を続け、毎年夏休みに行っているイタリアサッカー研修会の講師として招聘した。彼は1996、97年以来3度目の来日で約3週間滞在、日本各地で指導者講習会を開催し最新の情報を与えてくれた。この中からイタリアが考える選手育成方針をワールドカップの試合分析、少年サッカーの指導の考え方などを紹介しながらレポートしたい。

ワールドカップの試合分析

ワールドカップはサッカー関係者にとって最も重要なイベントである。今回は特に地元

日本で開催されたことで、これまでサッカーに関心がなかった人にも興味を持ってくれたことは大変うれしい事である。その背景には、日本代表や共同開催国韓国の躍進がありサッカーを十分楽しむことができた。一方われわれコーチにとってワールドカップは単なるイベントではなく、世界のサッカーがどのような発展をし、これからどのような方向に行くのかを確かめる場であり、国のレベルを直接比較できるチャンスであったりする。サッカーは数値で分析しにくい種目でその数値の優劣がそのまま成績にともなわない事も多いが、様々な方向から評価を与える事で見えてくるものもある。

1. グローバル化

ベスト8に進出したチームをみると5大陸のすべてからチ

		QUARTI DI FINALE				
		EUROPA	SUDAMERICA	CENTROAM.	AFRICA	ASIA
Messico 1970		Italia Germania O. Inghilterra	Uruguay Brasile Perù	Messico		
Germania 1974		Germania O. Germania F. Olanda Svezia Jugoslavia	Brasile Argentina			
Argentina 1978		Olanda Italia Germania O. Austria Polonia	Argentina Brasile Perù			
Spagna* 1982		Italia Polonia Francia Germania				
Messico 1986		Francia Germania O. Inghilterra Belgio Spagna	Brasile Argentina	Messico		
Italia 1990		Jugoslavia Italia Eire Germania O. Cecoslovac.	Inghilterra	Argentina		Camerun
Usa 1994		Italia Spagna Olanda Bulgaria Svezia	Germania Romania	Brasile		
Francia 1998		Francia Italia Danimarca Olanda Croazia	Germania	Brasile Argentina		
Corea Giappone 2002		Inghilterra Germania Spagna Turchia	Brasile	Stati Uniti	Senegal	Corea Sud

過去ワールドカップのベスト8チーム(大陸別)

ムが進出した。これは、過去ありえなかったことである。優れた選手は国境を越えてプレーし、監督もまた外国人が活躍する時代となった。南米とヨーロッパがしのぎを削りお互いの良い所を吸収しあった時代から、交通の発達も手伝って世界中あらゆる地域や国がレベルアップの為交流する時代となった。フランスを破ったセネガルは選手のほとんどがフランスでプレーし、これまでサッカー後進地域と見られていたアジアも日本がトルシエ氏をフランスから、韓国がオランダからヒディング氏を迎えた結果好成績を収めた。選手も中田選手やアン・ジョンファン選手など海外で活躍する選手が出てきた。今後もこのグローバル化は進むであろうし、お互いの良い所を吸収する事でサッカーは発展していく事であろう。

2. 強国の敗退

開幕戦でのフランス敗戦で象徴されるように、イタリア、スペイン、ポルトガル、アルゼンチンなど強国が敗退していったのもこの大会の大きな特徴であった。これらの国の選手は所属するクラブチームで年間約70試合を行う。5月でシーズンが終了し、梅雨時期を考慮して早く開幕したワールドカップにコンディションを調整できなかった事は否めない。特にイタリア、スペインは勝利への意欲が欠けていたように思う。日本や韓国は自国開催ということもあり調整が非常にうまくいったのではないかと。しかしながら、準優勝したドイツもまたハードなシーズンを経験しており、選手が海外でプレーしチーム作りが困難な環境にあるアルゼンチンとブラジルが、一方は一次リーグで敗退し、一方が優勝した事実はどのように説明すればよいのだろうか。サッカーにはデータや分析では見つけられない何かが存在するのである。

3. スター不在

この大会は過去の大会で見るとようなビッグスターが不在の大会だった。86年、90年のマラドーナ、94年のバジジョ、98年のジダンのようなスーパースターは生まれなかった。ロナウドは得点王に輝いたものの、トップフォームではなかった。サッカー界は1980年以降医学の発達により選手個人のフィジカル面の発達が見られるようになり、コンピューターの発達により試合分析の技術が進歩しチーム戦術が発達した。プレーするスペースが狭められ、スピードの向上が求められた。二つの拮抗したチームの試合はお互いの良いところを打ち消すサッカーに終始し、サッカー自体の面白さがなくなってきた。この傾向は1990年のイタリア大会で顕著に表れた。サッカーが進化し、個人が活躍しにくい環境ということも言えなくはないが、だからといって今後スターが誕生しないということはないであろう。むしろ、コーチにとってもサッカーファンであっても望んでいることは、マラドーナのようなスーパースターの誕生である。

4. ゴール数の減少

サッカー最大の魅力ゴールは、減少傾向にある。過去ワールドカップの1試合平均得点をグラフに示した。90年まで減少傾向にあったゴール数は94年大会で増加する。この原因はGKへのバックパスとオフサイドに関するルール改正である。この改正により攻撃が有利となり得点が増えた。しかし、その後は減少傾向にある。ルール改正に対して守備の向上が

見られたのであろう。GKの技術も向上し、極端にラインを上げてオフサイドを利用して守る戦術も少なくなってしまう。得点が少なくなる事が「進歩」と呼べるかはむずかしい所だが、守備の進歩の方が攻撃を上回っている。今後も大きなルールが変わらない限りこの傾向は続くであろう。

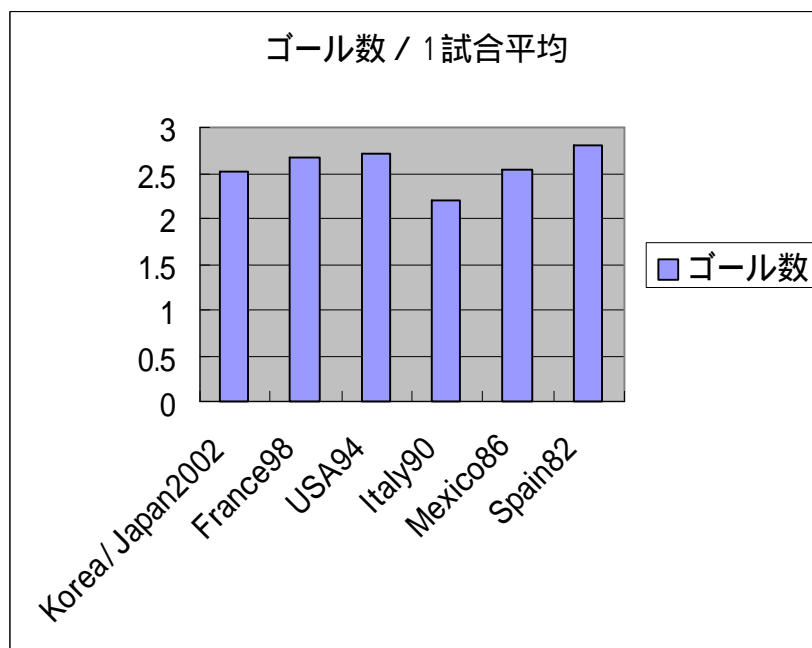


図 1 過去ワールドカップにおける 1 試合平均得点数

攻撃のプレー(1試合平均数)

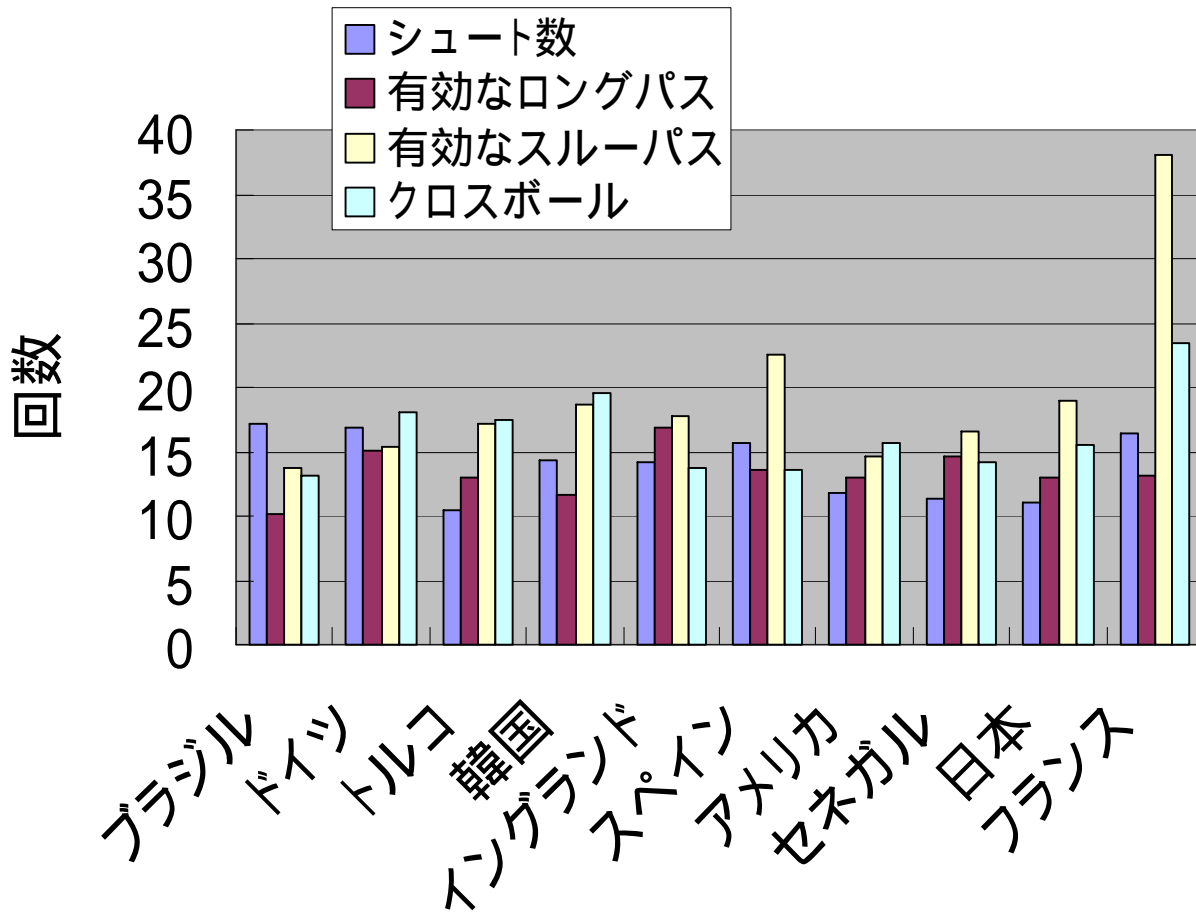


図 2 攻撃の分析

5. 攻撃の分析

攻撃の分析は「シュート数」, シュートに結びついた「有効なロングパス」, 「スルーパス」, 「クロスボール」について1試合平均値を調べた。図2のグラフで日本、フランス以外はベスト8に進出したチームである。優勝したブラジルはシュート数も多く、32チーム数第3位であった。しかしながら意外なことに有効なロングパス、スルーパスがともに低い数値であった。さらに浮いたパスの本数を調べた結果、ブラジルは少ない数値であった。ロングパスが少なく、有効なスルーパスも少なかったにもかかわらず多くの得点をあげ優勝できたのはパスに頼らずドリブルなど個人の力で得点に至ったのではないと思われる。この他敗れたチームの中でも意外なデータを残したチームがある。3試合と少ないデータ数ではあるが、アルゼンチンのシュート数は第1位で19本のシュートを放った。フランスもまたシュート数は第5位で約16本、有効なスルーパスは約38本で断然トップ、クロスも約24本の第2位とかなり攻撃的なサッカーを行ったといえる。それにもかかわらず得点が入らず勝利できなかったのは、不運と言う他ない。

6. 守備の分析

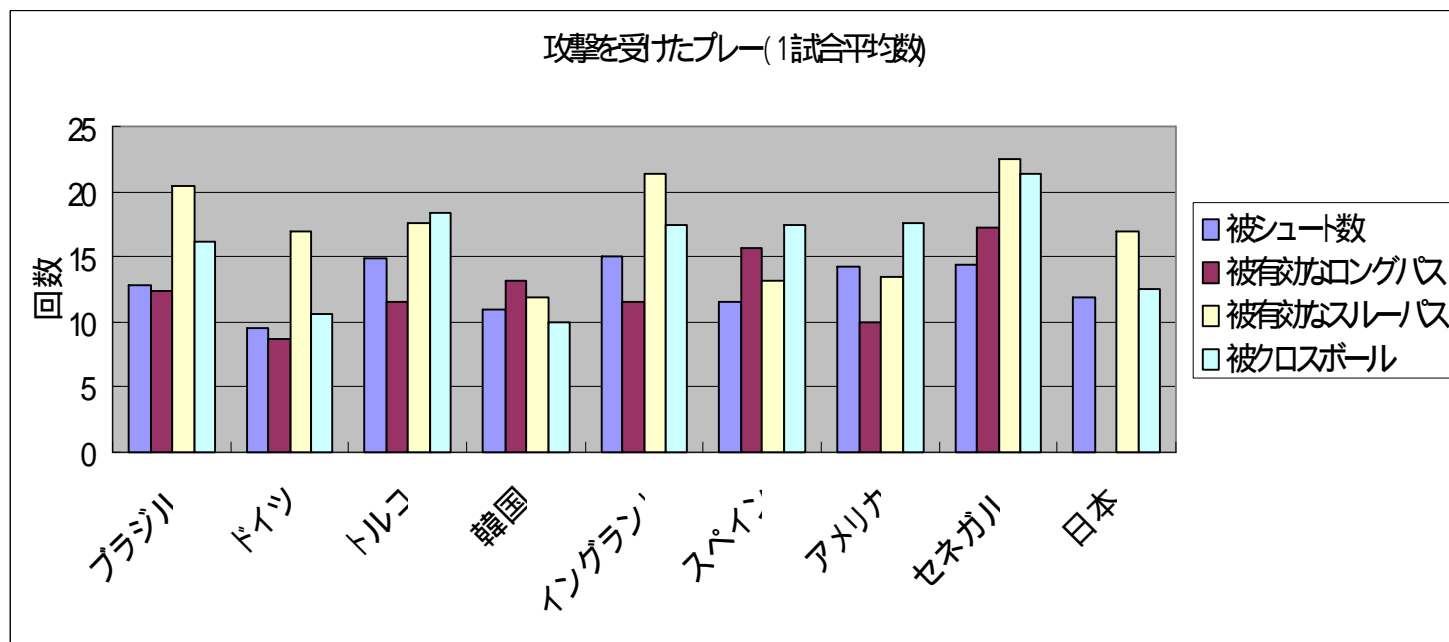


図3 守備の分析

守備の分析はシュートを受けた回数、有効なロングパスを受けた回数、有効なスルーパスを受けた回数、クロスボールを受けた回数を調べてみた。図3のグラフは、攻撃のグラフと同様日本以外はベスト8進出したチームのデータである。日本の「被有効なロングパス」はデータがなかったため空欄となっている。ブラジルは守備のデータとしてはあまりよくない数値である。守備のデータが悪いにもかかわらず優勝したのは、攻撃的なサッカーをしたためではないかと思われる。

データでは示していないが、チームの縦の距離（ディフェンスラインからフォワードまで）は長くなっている傾向にある。FWが前線からプレッシャーをかけているのが原因である。実際に点が入った場面进行分析すると相手コートで奪ってからゴールに結び付けている得点が多かった。

7. 組織から個人へ

現代サッカーのモデルであり、現状を映し出す鏡としてのワールドカップ。今回の大会では、強国の敗退、スター不在、新しい戦術が発見できなかったなどマイナス面が目立った大会でもあったが、最初に述べたグローバル化はサッカーを発展していくためには必要な要素であり、これがこの大会の最高の成果であるといえる。選手は国や地域を越えあらゆるサッカースタイルに馴化し、良いところを吸収して自国に戻る。また、優勝したブラジルを分析することで見えてきたものは、「個人の力」の重要性であった。組織の攻撃や守備の発展より、個人の力を強化することがこれから望まれるのではないか。この仮説が正しいとすれば、若い年代の選手から個人をより高めていくことをコンセプトに育てていか

なくてはならない。「チームの目先の勝利」より「選手としての勝利者」となるためのトレーニングをしなければならない。

少年サッカーの指導法

1. 現代サッカー選手に求められるもの

ワールドカップの分析などによって、現代サッカーにおいて選手が求められているものが見えてくる。個人の攻撃と守備能力を高めること、さらにそれは、「狭いスペースで、短い時間で判断し、スピーディーにかつ正確にプレーする事」に集約される。選手が大人になった時、これらが出来ないとトップレベルでは通用しない。そのために、6 - 16 歳の間にもどのようなトレーニングを行えばよいのだろうか。

2. サッカーとはどんなスポーツか

選手を育てるという事を語る前に、サッカーとはどのようなスポーツなのかを少し説明したい。種目の特性を認識する事で教えるべきものが見えてくるからである。

まず、サッカーを支えるものとして技術、戦術、体力、感覚調整力の4つに分類する。これ以外にも精神力は全てを支える上で重要な要素であるが、ここでは割愛する。感覚調整力については、日本では体力に含まれているかもしれないがリズム感とかバランス力とか体の動きを調整する能力と考えてもらってよい。これは、後で詳しく説明を加えたい。戦術と体力は、少年時代でも必要なものではあるがどちらかというとな年齢が高くなってから要求されるものであり、それぞれ独自の理論が数多く存在するのでここでは詳しく述べない。これらの要素は図4のような関係になるのではないか。体を動かす基本的な体力が技術と感覚調整力を支え、さらに戦術を支えている。体力が貧弱であると土台部分が弱くなり高度な戦術を支える事は出来ない。また、体力があっても確かな技術がなくては優れた戦術を行う事が出来ない。

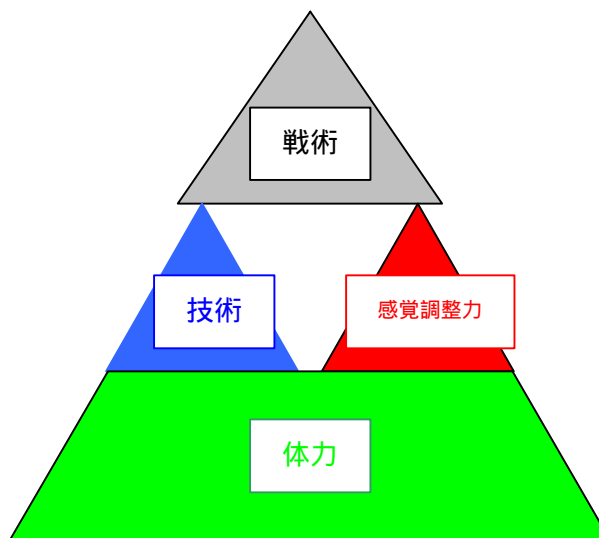


図4 サッカーを構成する要素のモデル

3. 4要素の学ぶべき年齢

4要素の戦術、体力、感覚調整力、技術は身につけやすい年代が違ってくる。特に神経系の発達がほぼ100%に達する10歳前後までに感覚調整力は鍛えておかななくてはならない。技術は少年期において大切なものである。ただイタリアでは技術はキック、トラップといった一つの技術を別々にやらせるというよりも、感覚調整力や戦術と組み合わせて総合的に行わせる方法をとっている。例えばインサイドキックを指導するとして、一番簡単な方法

4 要素の学ぶべき年齢

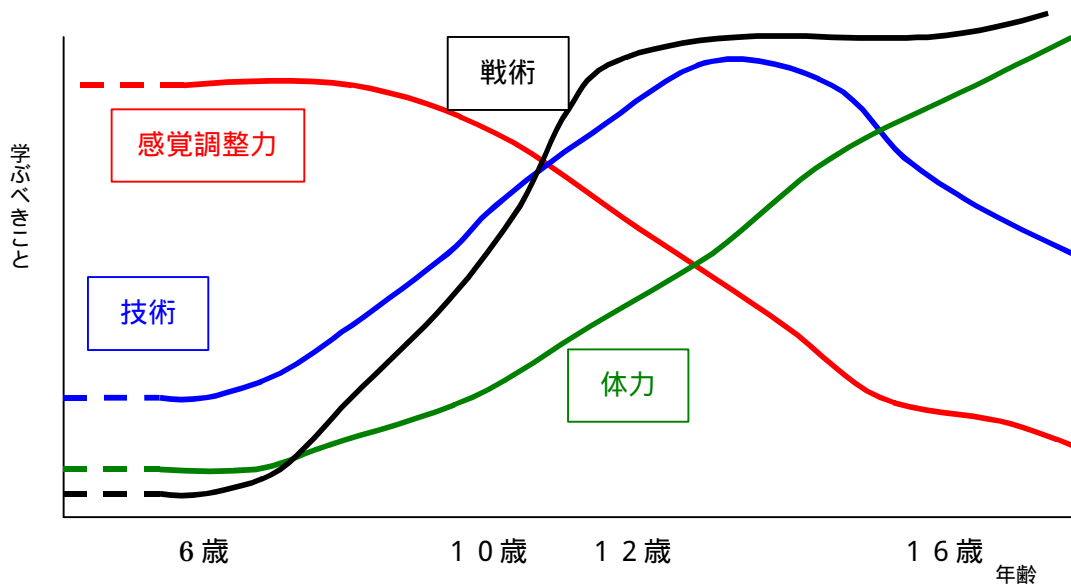


図 5

として止まっているボールを蹴るという練習がある。これを2人組で行うとボールを止めるというストップの技術練習が加わる。インサイドキックの練習をテーマとしているが、実際はストップする練習も含まれている。さらに、止めたボールを少しドリブルしてからインサイドキックでパスをするように練習を変えると、ドリブル練習も含まれている。この3段階の発展で練習のテーマは「インサイドキック」であるが、実際の練習ではストップやドリブルの要素も含まれている練習と発展している。この発展性を利用して戦術とか判断力、感覚調整力といった他の要素も大いに取り入れながら行うのがイタリアの練習方法である。

サッカーの試合を見ると、この第3段階の練習では不十分である事が分かる。なぜなら、試合の中では直接妨害をする守備者が常に存在するからである。コーンを並べて行うジグザグドリブル練習も、実際の試合の中で「使える」技術練習としては不足している。イタリアでは、15年前から実際の試合で使えるような工夫された技術練習を行っている。図5でこの4要素の学ぶべき年代と比率を示した。感覚調整力は10歳ぐらいまで一番大切な練習として位置付ける。もちろん技術練習と関連付けて行う為サッカーの技術のトレーニングは行うのだが、練習の目的は技術向上より調整力の向上をはかる。戦術は10歳頃から比率が高くなり、大人になるにつれて一番大切なものとなる。技術は10歳頃まで行わないわけではないが、ボールを使って感覚調整力を高める事でより自然と学んでいく。10歳前後からより正確な技術を目指して比率は高まるが、なるべく技術練習だけを行うのではなく戦術要素を取り入れて判断を伴う技術が行えるようにする。体力は13歳頃から持久力、スピードなどから入り、15、6歳以降で筋力トレーニングも取り入れる。感覚調整力は15歳以降あまり身につかないので比率は少なくなってくる。

4. 感覚調整力 (コーディネーション)

感覚調整力には次のようなものがある。

○ 時空間認知能力

自分がどこにどのタイミングで移動すればよいか、またはどこにいるのかを認知

する能力。試合の中ではボールや守備者の動きを考えながら、移動するタイミングを決定しなければならない。

○ 反射能力

瞬間的に反射する能力。試合のプレーのほとんどがこの反射の速さが決め手となる。

○ 反応と適応変換能力

反射能力が瞬間的な反応に対して、これは変化する状況に応じて行動を適応する能力。例えば優秀な GK は FW の動きを観察してポジションを修正しシュートを簡単に止めてしまう。FW の変化する動きに「適応」してポジションを移動し「変換」する事が重要となる。年少者には経験のなさも手伝って、このようなことが出来ない。

○ 出力調整能力

パスの強弱など力の出力を調整する能力。単なる距離的な問題だけでなく、守備者やグラウンドの状態なども考慮して調整できる能力の事。トラップなどで力をどれくらい抜いたらよいのかといった事も含まれる。

○ リズム感

優秀な選手は優れたリズム感を持ち、独特な感覚を持っている。

○ バランス力

静的なバランス、動的なバランス、空間的なバランスがあり、筋力との関係もあるが、バランス力がある選手は相手に当たられてもバランスを崩さない。

○ コンビネーション

トラップしてシュートするなど、異なった技術を組み合わせる事。サッカーはほとんどコンビネーションによって行われている。

これらについては本誌 2001 年 1 月号 P42 - 47 に詳しく記述したので読んでいただきたいが、これらの能力は単に技術とは違うものである。もちろん感覚調整力を高める目的はサッカーの向上である為、例えばバランス力を高めるといっても平均台を歩かせるといった事はあまり意味がない。サッカーのプレーの中でこれらが高めるべきである。つまり、ボールを使った技術練習を含めながら、戦術要素も取り入れてやっていくのである。

5. 技術と感覚調整力の関係

少年期にパーフェクトスキルを求める。これは大切な事である。ところで、パーフェクトスキルとはいったいどういうものなのであろうか？インサイドキックのパーフェクトスキルとは何か？インサイドキックで 10 m 離れて置いたコーンに静止したボールを蹴って当てるテストをする。10 回行って 10 回当てる事ができた。100 回やって 100 回成功した。ワールドカップに出場しているプロの選手ならそれほどむずかしい事ではないだろう。しかし、図 6 のような場面でパスが成功するかどうかは別の問題である。パーフェクトスキルを持っていたとしても、そこにはパスの強さ、タイミング、パスを受ける選手の能力、

守備者の位置によって、様々な調整力が必要となる。インサイドキックを正確に蹴るということはまず、立ち足の位置、足首の固定、膝の曲げ具合といったといったフォームが正しく行っている事。これは、「動作の正確さ」ということになる。どうしても「正確さ」というとこの動作の正確さに注目しがちだが、サッカーで大切なのは「動作の正確さ」よりパスが成功したかという「目的の正確さ」が重要になってくる。日本で言う「技術の正確さ」とは、当然目的の正確さ

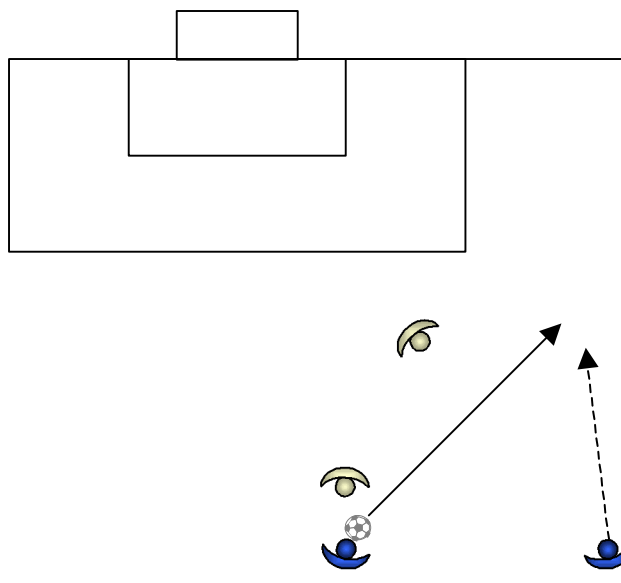


図 6

も含まれていると思うが、イタリアでは目的の正確さを高める為に感覚調整力の向上が必要と考えている。図6の場面ではパスを出す選手は「出力調整能力」によってパスを出す強さを調整しなくてはならない。弱いパスだとパスをカットされ、強すぎるとタッチラインを割ってしまうだろう。また、グラウンドの状態にもよってこの強さは変わってくる。

6. 技術トレーニング

イタリアでは15年ぐらい前までは個々の技術練習をやって、総合的な技術練習へと発展させる方法をとっていた。敵選手をつけない状態でキックやトラップ、ドリブル、シュートの練習をしてある程度できるようになってから敵選手をつけ戦術練習へと移行していた。スペースと時間がたくさんある「昔のサッカー」では、それでも良かったかもしれない。しかしサッカーを分析するようになってそのような方法は間違っていると考えようになった。始めに現代サッカーに求められるものとして「狭いスペースで、短い時間で判断し、スピーディーにかつ正確にプレーする事」と述べたが、忘れてならないのはこれを「直接妨害する『守備者』のプレッシャーを受けながら」行わなければならないという事である。

7. オープンスキルとクローズドスキル

いろんなスポーツの「技術」とはいったいどんなものがあるのだろうか？例えば、体操競技を考えてみよう。体操の技術はある技を正確に行う事が勝負のポイントとなる。つまり「動作の正確さ」が最も重要となってくる。試合会場は同じ大きさで、選手を取り巻く環境の変化は少ない。練習は技術を体で覚えて「自動化」することによって競技力が高められる。水泳もクロールなど体の動きを自動化し効率よく泳ぐ事によってタイムが向上する。プールはどこへ行っても同じ50mであり、もちろん水温や戦う相手によって戦術的かけひきはあったとしても、サッカーに比べて環境の変化は少ない。まして体操や水泳で他の選手が突然邪魔をしに乱入してくる事はありえない。それに引き換えサッカーは、常に選手の周

りの環境が変化している。正しいキックをしようとしても、突然後からタックルがやってくる。たとうまく蹴ることができたとしても、パスは途中でインターセプトされる事だってある。サッカーのように周りの要素が変化しながら発揮する技術をオープンスキルと呼び、体操や水泳のようにあまり変化がない状態で発揮するスキルをクローズドスキルと呼ぶ。オープンスキルでは、技術の自動化も必要であるがそこに常に判断するという行為が存在する。思考判断能力は技術を発揮する上で大変重要な事で、判断のトレーニングなくしてサッカーのトレーニングはありえない。しかも、時間がない、スペースがない状態で、素早くそれを行わなくてはならない。

これらの能力を開発する為に、トレーニングは個々の細かい技術の修正を行うより、総合的にやらせてミスをしながらか上達させる方法のほうが良いと思う。

8. スピードと正確性

物事を習得する時はじめはゆっくりと行い、次第にスピードを上げていくのは正しい方法である。車の運転を考えてみよう。初めて自動車に乗った教習所でいきなり100kmで走るとどうなるか想像はつくだろう。そういうことが出来ないように、教官の足元にはブレーキがついているのだが、スピードをあげると正確さは減少する。技術を習得する場合、ゆっくりと正確に行ってから速い動きに移行すべきという考え方がある。初期の段階ではこれでよいかもしれないが、ある程度できるようになったらスピードを求めるべきではないかと考える。ゆっくりとした技術と速く行う技術とは根本的に違うものである。スピードが求められる現代サッカーに対応する選手を育てる為には早い段階からスピードを求めていかなくてはならない。当然そこにミスは起こってくるが、指導者はこれに目をつぶらなければならない。車の運転は未熟なまま路上に出てスピードを出しすぎるととんでもない事になるが、サッカーではせいぜい転んで血が出るくらいである。

9. トレーニングの構成

それでは今まで述べてきたことを実際のトレーニングにどのように反映させるかを考えてみたい。トレーニングを考える上で大切な要素はまず目的をはっきりさせること。一つのメニューを行うときにこの目的が明確にしなければ指導したり、修正したりしにくくなってしまふ。練習に参加する人数や使用できるスペース、時間、用具などはあらかじめわかる事だがそれとは別に、オーガナイズの人数(グループ分けや、ローテーションの方法、順番待ちを利用した休憩の設定など)、設定スペースの大きさ(人数に対してどれくらいの大きさが妥当か)、練習時間配分(1回の練習時間を何分ぐらいに設定するか)、練習負荷(守備者を入れたり、人数を調節したりして負荷を設定する)などを決めていく。

10. トレーニングの実際

例えば、パス能力の向上を例にとってみる。インサイド、インステップキックなど向上させたいものを限定しても良いが、ここではパスをする能力の向上ということで行う。パスの練習を考えるとまず一人でパスの練習はやりにくいので、二人組みでパス交換する練習を思い浮かべる。(図7)

この練習は試合の中で行われるプレーからはほぼ遠い状態の練習設定である。もちろん初心者や 6-8 歳ぐらいの小さい年代に導入としては良いとは思いますが、ある程度キック

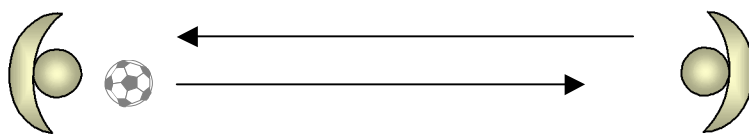


図 7

が出来てくればこればかりでは不十分である。試合の中ではパスを出す人も、受ける人も常に守備者からプレッシャーを受け、インターセプトを狙う選手がいる。しかし、図 8 のように直接妨害する選手を 3 人も入れるとパスの練習ではなくなってしまうだろう。そこで図 9 のように状況を設定することにより、図 7 の練習よりは状況が複雑になり、少し試合の状況に近くなることが出来る。

距離は選手のレベルに合わせる。

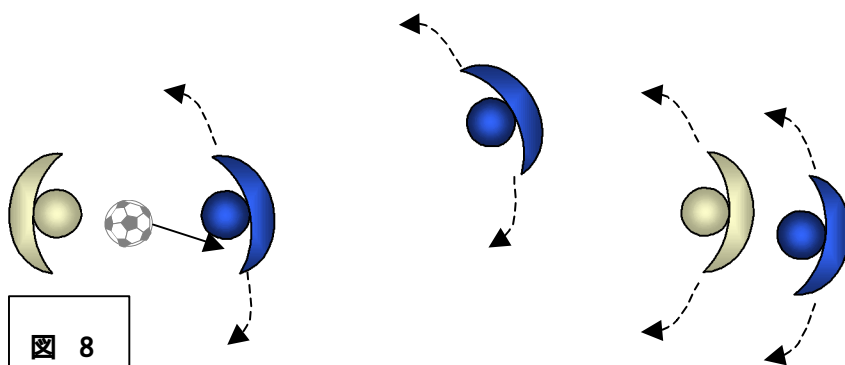


図 8

近くするとインサイドやインステップを使い、遠くするとインフロントなどのキックを使う。オーガニズを変えることで使う技術が変わってくる。またボール同士が衝突する設定により「ボールをパスするタイミングを計る」ということが加わってくる。図 7 の練習はパスのタイミ

ングは関係なかったが、図 9 の練習ではこれが加わり実際の試合に近づいていることがわかる。さらに、この練習では敵選手がいないのでそれを加えてみよう。図 8 のように守備者が自由に動ける

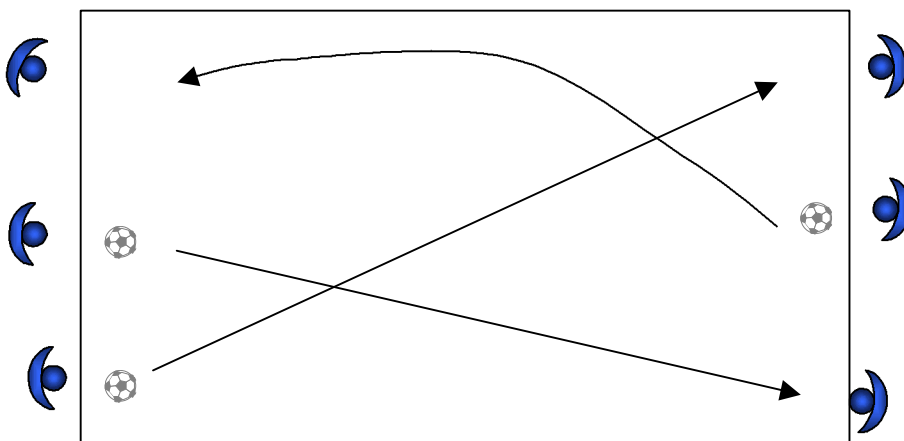


図 9 ラインの外から斜め向いの人とパス交換する。

ようにするとプレッシャーが厳しすぎるので図 10 のように守備者を真中のライン上に動くという制限を加えてパスをカットするだけの守備を行う。グラウンドの大きさを変える

ことでプレッシャーの度合いが変わって来る。もう少し実際の試合に近づけると守備者を半分のエリア内全て動けるように条件を変えてみる。(図11)このように同じパスの練習でも設定を変えていくことでプレーの困難さが増していき実際の試合と似た状況を設定することが出来る。

さらに、時間的なプレッシャーを与えるために1分間に守備者が何回インターセプト出来るかを競争で行ったり、守備者2人がローテーションで代わり、一番多くインターセプトしたグループを決めたり競争形式にすること

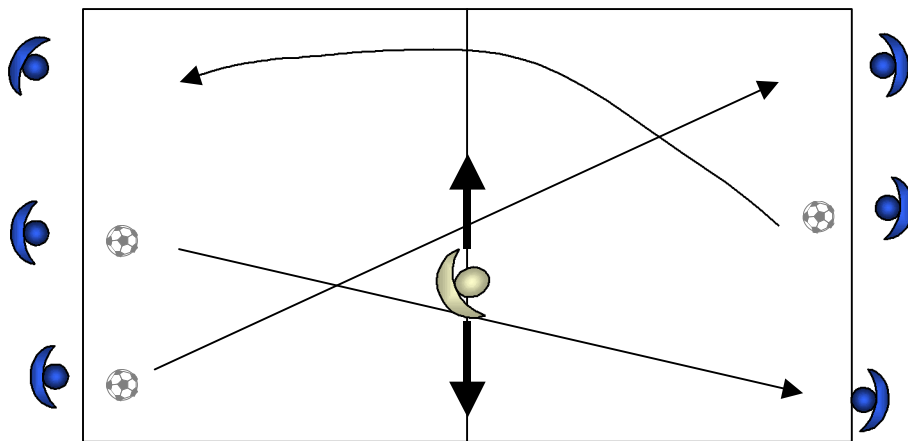


図 10

でさらに時間的な制約を受けるようになる。

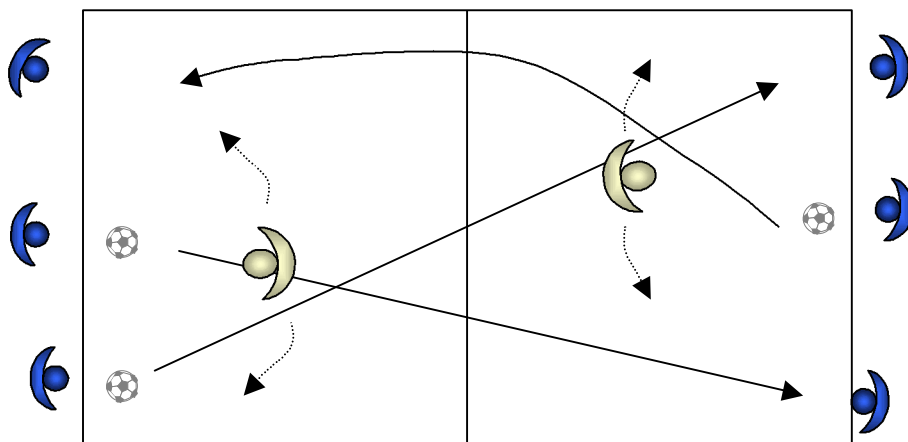


図 11

11. オーガナイズを決める要素

選手のレベルに応じて練習に変化をつけていく事は大変重要な事である。優秀なコーチは常に選手が目的を達成する為に効果的なトレーニングがなされているかチェックし、修正すべき点があればすぐに直していくものである。他のコーチがやっている練習をそのままやっていたはいけない。その修正するポイントを述べてみる。

- グラウンドの大きさ(スペース)

攻撃者にとって直接邪魔をする守備者がいる場合、大きくなると簡単になり、小さくなるとむずかしくなる。守備者がいない場合は大きくなると難しくなり、小さくなると簡単になる。

○ 時間

短くすると集中力が高まり技術的、戦術的要素が高まる。長くすると体力的な要素が高まる。

○ 守備者（負荷）

守備者を入れると攻撃者の時間的、空間的プレッシャーが高まる。判断という要素が高まる。守備者を多くしすぎると、攻撃者の成功が少なくなる。

これらスペース、時間、負荷を調節する事によって練習の目的をより効果的に行う事が出来る。先に述べたパスの練習を参考にいろんな練習でも発展させてほしい。私がコーチに教えるのはメニューの提供ではなく、考え方の提供である。何度も言うが、教える事は選手のレベル、グラウンドの用具、環境などで変わってくる。人がやっている練習をそのまま自分の選手にやっても全く効果的でないこともある。

最後に . . . 講習をアシスタントした天野より . . .

ステファアーノは数多くの練習メニューを紹介し、多くの理論を展開した。彼は世界各地で180以上もの論文を発表し数多くの出版物も書いている。彼の話聞くたびにサッカーの深さを思い知らされる。実技は情熱的で受講者が大人であっても動きが悪いと大声で叱り飛ばしていた。しかし、人の意見を聞き入れたり話題に対してディスカッションしたりなどオープンマインドを決して忘れない紳士でもあった。彼が言うとおり、イタリアのものをそのまま日本で有効かどうかは分からない。スポーツでは何が何でもサッカーがナンバーワンのイタリアとそうでない日本では多くの環境が違いすぎる。ワールドカップで発展したように日本は独自の指導法や選手育成システムを確立すべきであると思う。そのヒントに彼の考え方を取り入れていけばよいと思う。

フレスカはステファアーノ氏を中心に今後もイタリアのサッカーを研究しながら、選手に還元していきたい。なお、指導者を対象に今年もまた12月上旬に「第7回指導者イタリア研修」を企画している。ご興味がある方は、下記まで。

フットボールクラブフレスカ 078-975-1994

文中内の資料は全てステファアーノ・ドッタビオ氏が作成した。

築出さんへ

太田の切実な願いです。この写真を掲載してください！！！！

天野より



中央がステファノー・ドッタビオ氏。右は今回のレポートを担当したフレスカの天野。
左はイタリア人講習会をコーディネートしたハッピースポーツの太田。

気合を入れて、写真を取り直したのでこれもよろしくお願いします。



天野泰男 1961年神戸市生まれ

1984年より神戸フットボールクラブで小・中学生を指導。Lリーグの田崎ペルーレのコーチ、監督を経て1996年FCフレスカのコーチ就任し現在は指導者養成部門の責任者。関西クラブユース連盟副理事長。大阪体育大学卒。